

昭和60年3月に平和の村宣言を採択して以降、「占冠村教育を語る住民会議」が中心となり、ヒロシマ・ナガサキの惨劇を絶対に繰り返さず核も戦争もない平和な社会を願い、村内の中学生を広島県に派遣する「広島平和体験学習事業」を行っています。

今回は生徒2人・引率1人が参加しました。ヒロシマの地から学んだことや感じたことを報告していただきます。

原爆について学んだこと

占冠中学校2年

浦田 香純

8月6日に原爆が落とされ、1149人が亡くなり、453人が負傷しました。原子爆弾は長さ約3m。重さは約4トン。爆心地から約半径2kmが全焼しました。原子爆弾には、熱線、爆風、放射線の3つの脅威があります。中でも放射線の影響は長い間被爆した人々を苦しめました。原子爆弾から直接放出される初期放射線や、爆発後に放射線が地面などに残ったり、雨などと一緒に地上に降ったりする残留放射線によって体の遺伝子、染色体が傷つくことで人体に様々な影響が出ました。吐き気、脱毛、出血、発熱などが起こる急性障害やケロイド、白血病、悪性腫瘍などを発症させたり、被爆した女の人から生まれる子供に発症することがある小頭症が起こる後障害によってたくさんの方が亡くなりました。

それらの悲惨な過去を後世へ伝えるために、広島では、毎年8月6日に平和祈

念式典を開催したり、写真や実物、絵や文などで当時の状況を伝える平和記念資料館を開いたり、被爆者の語り手による講演を行うなどの取り組みをしています。

私たちも実際に被ばく建物めぐりに行き、被ばくした当時の建物がのこされているところや、その一部を展示してあるところを案内していただきました。

自分たちも、支援団体への募金や、平和を守るための署名をするなどの取り組みに参加することができます。

また、現在は戦争を知らない世代の増加により、原爆の風化が懸念されています。そのため、まずは原爆の歴史や世界の現状を学ぶことも大切だと考えました。



平和は願うだけでよいのか
引率者（教諭）

長瀬 桃果

今年で3回目となる広島への訪問。過去の旅で受け止めてきた歴史の重みを大切にしながら、今回は「いま目の前にいる子どもたちの温かな日常をどう守り、未来へ届けていけるだろうか」という思いを胸に臨んだ。

被爆体験講話では、当時3歳で被爆された辻さんのお話を伺った。夜中に何度も叩き起こされ防空壕へ逃

げ込んだ体験や、原爆投下直後の焼け野原の中を、幼かった辻さんを抱えて兄を探し回った母の姿が語られた。原爆の苦しみは8月6日の一瞬にとどまらず、世代を超えて続く後遺症や、倦怠感や体調不良の続く「原爆ぶらぶら病」による社会的偏見・差別などが、長年にわたりご家族を苦しめ続けた。自ら英語を学び世界へ平和を訴え続ける姿や熱い想いに触れ、今を・これからを生きていく私たちが平和の伝承者とならなければならぬと感じた。

また、現地で教えていた

広島で学んできたこと

占冠中学校2年
相馬

私は今回、4日間広島へ行きました。そこで原爆ドームなどの被爆建物や資料館を訪れ、たくさんの方を学んできました。

まず2日目に原爆ドームを見ました。原爆ドームは爆心地から160mしか離れていません。そのことにも関わらず、現存している事実に残いと思ったと同時に原爆という兵器が恐ろしいものだということを感ずました。次に広島平和記念資料館へ行きました。それぞれの展示物を見ていくと、原爆の被害を受けて皮膚が垂れ下がってしまった人、周りの建物のほとんどが全壊した写真、亡くなった方の遺品などを見て、予想以上の状況に衝撃を受けました。また、被爆体験者の講話では、原爆の放射線による後遺症などで苦しんでいる人が今でもいると教えていただきました。

をしました。その中で特に
衝撃を受けた建物は袋町小



だいた「ノー・モアヒロシマ」という言葉。惨禍とその後の苦しみを伺った今、この言葉は単なる標語ではなく、生き抜いた人々の切実な思いとして重く心に響いた。

被爆建物めぐりでは、旧日本銀行広島支店で爆風と熱線が入った3階と下層階での生存という運命の不条理を知り、通帳がなくても市民を信用して預金を払い出した助け合いの歴史に触れた。また袋町小学校では早期に授業が再開されたことを学び、「人々は学校がある日常を救いとして切実に求めていたのだ」と実感した。「75年は草木も生えない」と言われた土地で芽

学校です。その袋町小学校には被爆者の消息を知らせる伝言がたくさん残されていました。また、袋町小学校では救護所として救護活動をしていたことを知りました。私なら自分のことでいっぱいになってしまいうえですが、誰かのために動いて助ける姿勢はすごいなと思いました。その後も被爆した建物を一通り見て回りましたが、被爆して残った建物はどれも銀行などの頑丈な建物や鉄筋コンクリートが使われた建物だと知りました。

私は今回実際に広島に行き、改めて原爆は多くの人の命を奪ってしまう恐ろしい兵器であることと、二度と戦争をしてはいけないということを学びました。ですが、今でも戦争は行われており、2025年1月時点で1万以上の核兵器があるとされています。世界で唯一の被爆国として原爆の恐ろしさについて世界中に伝える必要があると思います。なので、私も原爆のことについて他の人に伝えられるようにしたいと思います。



吹いた被爆樹木やカンナの花を見留めたとき、絶望の中で日常を取り戻そうとした人々の大きな希望となっていたのだと感じた。

過去の歴史、復興を支えた人々の助け合い。そのすべての根底にあるのは「みんなが笑顔で生きられる日常を守りたい」という祈りである。「平和や子どもたちの幸せを心から願う気持ち」は、かつて焼け野原の「中」で子を探し走った親たちや、学校を再開させた人々と同じである。この学びを日々の生活を通じて多くの人に伝え、一人一人の幸せな未来と日常を守り育んでいきたい。